

図書館紹介

宜野湾市立中央公民館図書室に期待すること

図書室 司書・上原千佳さんに聞く

山口 真也

■はじめにー宜野湾市の不思議

私が沖縄で生活するようになって16年がたちます。住まいは勤務大学(沖縄国際大学)の近くにあるため、「宜野湾市民図書館」が自宅から一番近い公共図書館ということになるのですが、不思議に感じたのは図書館が市の外れにあるということでした。下の地図を見てもらえば分かるように、宜野湾市民図書館があるのは浦添市や西原町などの隣接する自治体との境のような場所なのです。



どこの地域でも公共図書館の用地確保は難しいと聞きますが、「こんな市の外れにわざわざ図書館を作らなくても…」と、当初は疑問に思ったのですが、事情はすぐに理解できました。宜野湾市の真ん中には在沖米軍の普天間飛行場があって、市民の誰もがアクセスしやすい場所に図書館を作れない致命的な制約があるのです。しかも、苛烈を極めた沖縄戦によって、戦前にあった図書館は建物も資料もその全て消失してしまい、沖縄県では図

書館の文化がいったん絶たれてしまっています。占領下では「琉米文化文化会館」が図書館の機能を有していたそうですが、アメリカによる検閲などもあったらしく、住民の自治や知的自由・知る権利の保障を前提とするものではなかったと伝えられています。沖縄県内で図書館設置運動が本格化するのには1972年の本土復帰後のことで、那覇市のベッドタウンとして人口が密集する宜野湾市では、設置が検討された1980年代末の時点ですでに市役所周辺を中心部には用地がなかったことは容易に想像できます。また、宜野湾市民図書館に残されている設置計画などの資料をみると、用地の選定においては、図書館という施設の性質上、普天間飛行場を離着陸する戦闘機の飛行ルートになっていない地区にしたい、という議論があったことも分かってきます。つまり、航空機騒音を避けて、図書館を設置しなければならないという事情から、宜野湾市のはずれに公共図書館が設置された経緯もあるようなのです。

■宜野湾市立中央公民館図書室の活動

宜野湾市の場合、市の真ん中に大きな基地があるため、市の中心部はもともと市の北東部に位置する市役所周辺に偏っています。商業的な中心地は海側にも広がっていますので、住宅地は基地を取り囲むように広がっています。全長5キロほどの小さな自治体ですから、

図書館まで歩いて移動できない距離ではありませんが、強い日差しと断続的なスコール、そして、サンゴ礁が隆起してできた沖縄の地形はアップダウンが多いため、直線距離でイメージするよりも図書館への道のりはかなり険しく感じられます。そもそも市の中心地には大きな基地があるので、市の北西部の海側に住む人たちが迂回して図書館に向かうためにはかなり時間がかかってしまいます。免許と自家用車を持っている人ならともかく、小さな子どもたちや高齢者、障害を持つ方が気軽に(日常的に)図書館を使うことはかなり難しいのではないかと思います。

市全域で図書館サービスを展開するためには、移動図書館と分館が重要となってきますが、宜野湾市民図書館には今のところ正式な「分館」は設置されていません。市民図書館が設置された当初は、分館を設置する計画もあったようですが、財政難もあってか、いつの間にか立ち消えとなり、現在は移動図書館が全域サービスを担っているようです。ただし、移動図書館は月に2回程度、サービスポイントを回って貸出をするのが中心ですから、やはり日常的に、気軽に来館できる分館がほしいと思っている利用者も多いのではないのでしょうか。

さて、宜野湾市には市立図書館の正式な分館は設置されていませんが、市立公民館の図書室は設置されています。宜野湾市役所の隣にある中央公民館(市民会館に併設)の3Fの一画に「宜野湾市立中央公民館図書室」が設けられており、火曜日を除く朝9時~17時までオープンしています。この公民館図書室の職員として、2014年4月から働いておられる上原千佳さん(司書)が私の勤務大学の卒業生ということで、お話を聞いたところ、市民図

書館の分館的な機能もある程度もっている、ということが分かってきました。少し前置きが長くなりましたが、上原さんへのインタビューをもとに、公民館図書室の活動状況と、市民として宜野湾市の図書館サービスに期待することを簡単にまとめてみようと思います。

①施設・利用者の特徴について

公民館図書室の広さは、少し広めの学校図書館くらいです。司書用の事務室はありませんが、すこし広めのカウンターには事務スペースがあり、さらにその奥には書庫スペースも設けられており(図3)、設計時から図書室として作られていたことが分かります。建物の角に作られているため、窓が多く、明るく開放的な雰囲気、見晴しもよく、市役所周辺の町並みや海が一望できます(図4・5)。高層階にありますが、入口はエレベーターにも近く、高齢者や障害者の利用の際にも負担は小さいのではないのでしょうか。こうした施設内に作られる「図書室」は、どうしてもおまけ扱いになりやすく、建物の端に追いやられてしまうことも多いのですが、古い建物ながらも、設計者がこの図書室を大切に思っていたことが伝わってきます。宜野湾市民図書館が設置される以前は、この図書室が地域の図書館ニーズの掘り起こしを期待された、重要な施設だったのでしょう。

利用者数は日によってばらつきがあるようですが、「多いときは30人くらい」、「常連の方が中心」とのことです。利用者層は「子どもとお年寄りが中心」とのこと、やはり宜野湾市民図書館に気軽に来館できない方々が図書館サービスを

利用するためにこの図書室に来られているのではないかと思います。私が見学した当日(2014年8月31日)もお孫さんを連れた女性が何人か来室されていました。

窓際には絵本や紙芝居などの児童書を集めて、畳を敷いたコーナーがつくられています(図7)。このスペースで「絵本を読んでいる親子連れの利用者も時々見かける」そうですが、予算の都合もあって、新しい絵本や児童書が少ないのが申し訳ないということでした。沖縄県立図書館や宜野湾市民図書館には「団体貸出」のサービスがありますので、それを利用して新しい絵本を揃えて、定期的に入れ替えていくとよいのではないかと提案してみました。現在、図書室には職員が1名しか配置されておらず、ボランティアの方に任せる曜日(水曜日)もあるそうです。昼食時には司書がカウンターをあけるため、蔵書の管理が難しい、ということでした。予算面での制約は図書館ネットワークを通じてある程度は解決できると思うのですが、1人態勢ではできないことも多いようです。せっかくの司書の配置がうまくいかされていないようにも感じました。



【図1 図書室の入口、左手前がカウンターと書庫スペース、カウンター前の記帳台には来館者数をメモするノートが置かれている】



【図2 入口右手のマガジンラックには料理本などの実用書と新刊本が並べられている】



【図3 書庫スペース、整理前の本、寄贈された本、季節の展示物、新聞のバックナンバー、排架用のブックトラックなどが置かれている】



【図4 入口から入って右手奥、文学書以外の一般書や郷土資料が並ぶ、右奥は児童コーナー】



【図5 窓からは市役所周辺と海を一望できる】



【図6 入り口から入って左手奥、文学書と学習用の閲覧席が並ぶ小部屋となっている。部屋の境目にドアがついている】



【図7 児童コーナー、畳敷きになっている】

②資料費・蔵書の特徴について

☞ 図書室の資料費は「1ヶ月に単行本を20冊くらい購入できるくらい」の規模で、単行本以外にも県内紙2紙と婦人雑誌を4タイトル定期購入しているとのこと。選書にあたっては、市の税金を有効に使うために「市民図書館とはできるだけ重複しないようにしている」そうです。常連の方からベストセラー本の寄贈を受けることもあるらしく、小さいながらも、この図書室が多くの利用者から愛されていることが伝わってきました。社会教育・生涯学習にかかる予算は本来は自治体が負担すべきだと思いますが、最近では日本の図書館界でも「寄付」や「クラウドファンディング」という動きが出てきています。図書室の存在を広くアピールして、寄贈本を積極的に募るといった働きかけが

あってもよいかもしれません。



【図8 雑誌コーナー、『ESSE』『クロワッサン』などの婦人向け雑誌が中心】

☞ 雑誌コーナーや展示スペースには、県内紙に挟み込まれている小冊子なども丁寧に整理・排架されており、地域資料・郷土資料の価値を知っている司書らしい姿勢が感じられました(図9)。宜野湾市の郷土資料を集めたコーナーも窓際に作られています。予算の制約があるため、多くの資料を購入することは難しいと思いますが、こうした取り組みをさらに広げて、①宜野湾市関係の新聞記事をスクラップしたり、②市役所が近いという利点を生かして役所内の各部署で作られる報告書や無料のパンフレットなどを集めることで、利用が多い子どもたちの地域学習・調べ学習をサポートできる、そうした図書館としての特色を出しても面白いのではないかと感じました。



【図9 左手前が宜野湾市の資料を集めたコーナー】



【図10 展示コーナー、今月は怖い本がテーマ】

③司書の仕事・図書室のサービスについて

☞市内在住者または在勤者であれば、個人は3冊まで14日間、団体は50冊まで30日以内の貸し出しができます。ただし、団体貸出はほとんど利用されておらず、「常連の方の貸出が多い」そうです。

☞カウンターにはレファレンス質問が寄せられることもあるそうです。ついこの間も「人工知能の本を探している」という成人の利用者からの質問があり、市民図書館の蔵書をインターネットのOPACを検索して紹介し、利用時間などを説明したとのこと。同じ市内にある図書室ですから、やはり利用者にとっては(図書館の機能を知っている利用者ほど)、市民図書館との区別はしないのだと思います。正式に分館として位置づけられていれば、資料やコピーを市民図書館から取り寄せたり、取り置きをシステムからできたり、よりよいサービスを提供できると感じました。

☞貸出はカードで行われているそうですが、「ブラウン式」が用いられ(図11)、どこ誰がいつ何を読んだのか、というプライバシー・個人情報がきちんと守られています。古い本にも背表紙裏にブラウンカードが備え付けられていて、開室当初

から、図書館サービスをしっかり理解された方が貸出方法を検討されてきたことが分かります。ただし、その後の運用の中でこの取り組みがやや疎かにされている点は気になりました。司書が昼休みをとる間(12時~13時)はカウンターが無人となり、利用者の利便性を考えて、透明のケースに、氏名をメモした用紙とカードを入れて持ち出してもらってセルフ貸出方式がとられています。メモを入れるボックスは開閉自由になっていて、これではせっかくブラウン式を用いている意味が小さくなってしまいます。また、カウンターの出入り口に鍵がかかるわけではないようですので、カウンター内のブラウンカードの管理なども含めて、個人情報保護上の問題が生じていると思います。いまは公民館施設の一部ですが、プライバシー保護は、やはり「知る権利」を保障する図書館サービスの基本です。今後、図書館の分館的な機能を果たしていくためには、職員の増員や貸出方式の見直しが必要になってくると思われます。

④分館的機能について・今後の課題

☞公民館図書室は、現在は正式には「市民図書館の分館ではない」とのことでしたが、ネットワークの機能がまったくないわけではないようです。市民図書館で借りた本を公民館1Fのブックポストで返却したり、反対に、この図書室で借りた本を市民図書館で返却することも可能です。こうしたサービスができるということは物流・配送の仕組みが整備されているということでしょう。あと一歩押し進めて、市民図書館の本を取り寄せて、こ

の図書室を窓口に貸出ができるようにすれば図書室の活動の幅がぐんと広がると思いますし、司書を配置している意味も大きくなると思います。



【図11 カウンター内のブ라운カードのボックス(左)とセルフ貸出用のボックス(下)】



■おわりに

最近では、何かと話題の「武雄市図書館」のように、大規模な(おしゃれな)図書館を設置するのがブームになっているようにも感じます。しかし、図書館サービスの公共性を考える時、子どもからお年寄り、障害をもつ人も含めて、誰もが日常的に利用できるという意味で、「中小図書館こそ図書館の中核」という理念は大切にしていかなければならないと思います。「図書館の設置及び運営上の望ましい基準(文部科学省告示)」にも「市町村立図書館と公民館図書室等との連携を推進することにより、当該市町村の全域サービス網の整備に努める」ことが示されています。宜野湾市の分館サービスの第一歩として、公民館図書室の活動にこれからも注目しています。

やまぐちしんや：沖縄国際大学

図書館あるある(小学校) TAMA

